

軍隊生活の思い出

鹿児島県 猪俣 清隆

父・千美治は農業を営み、私はその長男として産声を上げ、錦江湾のかなたに浮ぶ桜島を仰ぎ見る地で育ちました。平川高等小学校高等科二年を卒業して喜入町立青年学校第三部に入學しました。三部とは高等科三年の學制が廢止になり、その代替に一年間だけ設立されたもので、私は雨の日も風の日も一年間無欠席で通學しました。

家より瀬々串の農地の続く細い道を通って、六人の學友と通いました。瀬々串、中名、喜入まで約十二キロ歩いてやっと學校に着きます。我々は瀬々串よりの六人に、中名より八人、喜入より十一人、前之浜より七人、生見より七人、平川より一人が加わり、総員四十人でした。A組が四十人で担任は東先生で、自分はB組で担任は坂元先生、校長は松下先生でした。教練の担当は岡元准尉、

とお菜で十二錢、夜は飯屋で飯が十錢・お菜が六錢で、夕食は十六錢ですみました。

仕事の方は日勤と夜勤の一週間交替でした。夜勤は夜七時から翌日の朝の七時まで、終わって家に帰り寝ます。休みは毎月の第一と第三日曜日で、一カ月間でこの二日間だけの休みでした。戦時中で産業戦士として老いも若きも一生懸命でした。衣料品も百点の点数制で靴下が十点、ワイシャツ三十点とかで百点使えばもう何んにも買えませんでした。

米も配給制、青年男子で一日に一合五勺、青年女子が一日に一合の割合だったと記憶しております。飯屋も、どんぶり六分目ぐらい入ったのが一杯限りでした。糖分も無く鹿児島島の母より、からも飴を送って貰って嬉しかったことを覚えております。

数え年二十歳で徴兵検査の通知があり、鹿児島山谷小学校の講堂で二日間の検査を受けました。全裸で足先から頭まで軍医が検査をし、淋病・

指導員は今村上等兵と中道上等兵の二人でした。

谷山町の谷山高等小学校には高等科三年がありました。授業科を納めなければならないので喜入町に通ったのです。谷山には平川より八人行きました。私は一人、喜入町の青年學校に徒歩で通學しました。兄弟は男四人、女三人で、自分は長男で父母も大変だったと昔を回想し感謝しております。

喜入青年學校第三部を卒業して、谷山青年學校の二年生に編入されました。週に一日、地下足袋に巻脚絆を着け、平川・五位野・坂之上・和田を通り、谷山小学校の裏の青年學校に五年間励むつもりでした。しかし二年生の終わり頃、正月を過ぎてから知人の紹介で、名古屋市内の軍需工場に入社しました。

家は間借り、畳一枚が一円で、六畳間に気の会った同僚と同居していました。一人当り二円、朝飯と夕飯は飯屋で食べました。朝飯が十錢、ワカメの味噌汁が三錢でした。昼飯は会社の食堂で飯

梅毒にでも犯されていたら憲兵からものすごく叩かれます。私は何のことも無く「甲種合格」で兵種は野砲隊とのことでした。

昭和十八（一九四三）年四月十日、熊本市西部第二十一部隊野砲隊に現役入隊しました。第四中隊に編入され、中隊長は北森鶴雄中尉、第一内務班長野田一二三軍曹、寝台列長・塚原敬造兵長でした。入隊して一日目には軍服・帯剣・軍帽などが支給され、軍靴の文数は両方同じでは無く、被服係の古兵から「貴様の足を軍靴に合わせろ」と怒られたことを覚えています。

二日目は馬廐の見学で、中隊には馬が四十六頭いて、その名前を一つ覚えなくてはなりません。また野砲の手入れ、馬具の手入れなどの説明を受け、二日目まではお客様扱いでした。

三日目から猛烈な訓練が始まりました。毎日「十六演習場」まで駆け足で、時には軍歌を歌いながら演習場に到着し、十分間の小休止がありました。汗が、午後三時頃まで猛烈な演習が続ききました。汗

びつしよりになつた馬の全身を拭き、藁で擦り、足の泥を落し、蹄鉄油を塗り、足の爪を磨いて、やつと馬の手入れが終わるのです。それから野砲・小銃・帯剣・軍靴の手入れをします。手入れ中にも古参兵の一等兵が通ると、手入れを止めて起立、拳手の敬礼をします。何度会つてもしなければなりません。

わざと初年兵の手入れ中に、通る古参兵もいました。自分たちは星を一つ貰つたばかりの二等兵で、つくづく星の重さを痛感するのです。それが終わると休む間も無く、自分の洗濯、古兵の衣類洗濯です。襦袢、袴下・軍足など少しでも汚れが残っていると、それをくわえて犬の真似をしながら、四つんばいになって班長の所に行き、班長の個室の前で、立ち上がってノックをし、「猪俣二等兵は汚れた軍足をくわえて来ました」と叫び「ヨシ入れ」と許されると直立不動、拳手の敬礼をして、印鑑を貰つた後、平手で五、六回叩かれました。そうして軍足をくわえて内務班に戻ると、宮

着けたまま寝る。起床は早い者の順に一列に整列です。十番以下になると二百メートルぐらいある厩の回りを三回走らされ、また軍装したまま寝ているのを見つかると半殺しにされるほど叩かれるのです。自分は要領が良かったのか、三カ月間一度も見つからず、朝の整列ではいつも十番以内に入っていました。

それから作業服に着替えて厩の掃除です。馬の寝藁の敷き替えです。馬尿でびつしよりに濡れた藁を取り出して、日光に当て、乾かすのも大変な作業でした。厩の不寝番は初年兵の任務です。午後九時の消灯より午前六時の起床まで、三人の初年兵が三交替で勤めます。自分の勤務中に馬糞でも落ちていたら一大事です。時々幹部の候補生の見習士官が巡視に来ます。巡視の士官はいつ来るか分からないので絶えず気を付け綺麗にしておきます。もし自分の勤務中に士官が来たら、先づ敬礼をし「厩不寝番の猪俣二等兵であります。厩異状ありません」と敬礼をします。

崎出身の乙伍長、幹部候補に不合格の伍長にまた四、五回叩かれるので顔や尻に黒いアザが絶えたことはありませんでした。

軍隊は叩かれるところだとは思つて覚悟はして入隊をしましたが、こんなにひどく多く叩かれるとは夢にも思いませんでした。古兵達は手で叩くと自分の手が痛いので、軍靴の一部を切りとつたスリッパで尻を叩くので便所にしやがむのもやつとでした。夜は点呼後、初年兵同志を両方向き合わせ、叩き方の対抗試合をさせられます。相手が力一杯叩くと痛いので、自分は軽く叩きます。すると古兵が「そんな叩き方で貴様達は良いか」と思いきり古兵が手本を示した上で力いっぱい殴り合いをさせ、両方共顔が真赤に腫れたところで終わるのでした。どんな暴れん坊でも軍隊に入るとおとなしくなり、青菜に塩を掛けたようなものでした。

起床は午前六時、起床ラッパの音と共にはね起きます。前夜そつと襦袢、袴下、軍足、巻脚絆を三時間勤務すると、次の初年兵と交替し、馬厩の隣の畳二枚敷の部屋で仮眠をします。朝になって起床ラッパと共に跳ね起き、また馬の世話をします。脚にはめた蹄鉄の泥を落し、蹄鉄油で磨き、演習に出る前の準備をします。

それから水の呑み具合の検査をします。長い首の喉元に手を当ててゴクツゴクツと呑み込む音が六十回以上になつた馬はまず合格で、五十回以上の馬は疝痛の恐れがあります。もし疝痛でも起こしたら当番に当つた初年兵は夜も眠らず藁で腹を擦り続けなければなりません。もし一頭の馬を死なせたら、野砲隊に取つては大変なことで、「貴様達はハガキ一枚出せばすぐ補充出来るが、馬は一年間の調教が必要だ」と、古兵より何度か聞かされたことを覚えていきます。

三カ月が過ぎて第一期の検閲も終わり、今までの内務班とは別に大広間に移され、そこで起居しました。

昭和十八年八月一日から、演習もなくなりまし

た。第四中隊の初年兵は妻帯者だけを除き兵隊のほとんどが、戦地に行くこととなりました。

八月六日の朝十時、今までの軍装を着替えて夏衣の半袖のシャツ・半ズボン・戦闘帽・背のう・銃剣・軍靴・水筒・飯盒・認識票などの支給を受けました。真鍮しんちゅうで作った玉子型のうすい板に番号が書いてある認識票は、自分がいつどこで戦死をしても、すぐ分かるように帯革に着けました。

記念にと思い、軍服姿で野砲隊の営庭の片隅で、寝台列長の今は故人の塚原兵長と二人並び写真を撮りました。現在はただ一枚だけ残っている軍服姿です。塚原兵長から別れの言葉に書いた「乱れ飛ぶ弾丸の中にも征く一筋の道はありけり」の紙を貰い、改めて決意を固めたことを今でも記憶しております。

八月八日は初年兵の外出で、自分は熊本市内の水前寺公園に行き、これで日本も見納めかと思いい、鹿児島鹿児島の年老いた両親のことなども思い出し胸が熱くなる思いでした。

ブリテン島のラバウルに上陸し、ここで十日間の休養と英気を養いました。

九月十三日、ボーゲンビル島へ転進し、キエタに到着しました。引率にきた下士官は中村孝軍曹と木佐貫伍長で、木佐貫伍長は衛生兵担当の下士官で、一人ずつしか歩けない細い「三太郎峠」を越え、(この地名は、内地の熊本の三太郎峠に似ているので、古兵が付けたと聞かされました。)その日の夕暮に、目的地の同島のブインに到着し、早速、南海派遣軍明第九〇二四部隊に編入されました。中隊長は能村裕大尉、班長は熊本出身の内田晃軍曹、副班長は宮崎出身の甲斐軍曹でした。

食事は芋の雑炊に米が少し入っていて味噌汁は粉味噌も無く、塩汁に芋のくきと芋の葉が二、三枚浮んでいて、それが毎日の主食でした。椰子の実の中の水は甘くて、日本のサイダーみたいな味がし美味しく、殻は二つに割ると程良い大きさで、食器には最適でした。肉類の補給は、トカゲ・ワニ・ナマケモノでした。トカゲは背中背中の中央に

それから昭和十八年八月九日、夜十一時、西部第二十一部隊野砲隊を出発し、行軍で熊本駅へ、ここで軍用列車に乗り込み翌日八月十日朝、門司港駅に着きました。さらに行軍で佐世保港に着き、野営のテントを張り一夜を過ごしました。

八月十一日、いよいよ朝九時、貨物船「松江丸」に乗船しました。船は港を出て大分県の佐伯港に集結し、駆逐艦二隻に前後を護衛され、八月十二日の夜、佐伯港を出発しました。

それからは島影一つ見えず、太平洋の大海原を、ひたすら南下して行きました。船中は風呂も無く、体を拭く水さえなく、ただ咽を潤おすだけの飲み水がやつと与えられ、一日に携帯用の水筒一本だけの我慢でした。日が経つにつれ体にわく白い虱と南京虫退治は、船中での日課となりました。また船酔いの兵隊も多く出たため、飯は充分にあり、麦七に米が三の割合の飯と麩のはいった粉味噌の味噌汁でした。

船旅は二十三日かかってソロモン諸島のニュー

高い山のような瘤が二つ盛り上がり、一メートルから一メートル五〇センチぐらいの大きい物までいました。味は日本の鶏のような味でも美味しく感じました。ワニは四メートルから四メートル五〇センチぐらいの奴が泥沼に潜んでいて、不気味な顔をして頭を持ち上げたところを、小銃で狙い撃ちをします。それを初年兵の自分達が四、五人がかりで、現地人のパプア族の蛮刀を借りて裁く。ワニの肉を少しやると喜んで貸してくれます。さばいた肉は、初年兵が二人で担いで班内に持ち帰り、夜、料理して食べました。

味はあまり美味しくはなく日本の豚肉の白身のような味でした。蛇は一匹もいなくて、なぜだろうと不思議に思いました。ナマケモノは木の枝に尻尾を巻き付けて、頭を下にしてぶら下がっているところを小銃で撃ち落して料理します。臭いのが欠点でしたが背に腹は替えられず食べたことを覚えています。肉が固くてあまり美味しくはありませんでした。

夕暮になると蟬が多く出て来て、木の棒を拍子木のようにカチカチたたくと、椰子の木の手の届く所に何匹も来て止まります。捕まえて夜なるべく煙が出ないようにして焚火をして焼くと、日本での小さい海老のようで、とても美味しく感じました。

昼間は米軍の戦闘機のグラマン機が四、五機、低空で来襲して機銃掃射の連続で、壕の中に逃げるほかはありませんでした。

それで夜になったら椰子の皮で作った火縄の明かりを頼りに二、三人で食料を探しに出かけます。海岸などに行き、流れて来た椰子の実や、魚の缶詰、波打ち際に打ち寄せている乾パンなどが入った箱を見つけては食べ、生と死をさまよいながら飢をしのいだこともありました。班に帰って、毎晩就寝前になると、宮崎出身の同班のＴ軍曹から全身のアンマをヘトヘトになるまで続けさせられました。これも初年兵の勤めかと思ひ、夜の来るのがとても辛かったです。

って、武装解除をさせられ、小銃・銃剣・階級章・軍隊手帳・認識票など全部没収されました。

八月二十二日の朝、豪州軍兵士五、六人が鉄船で上陸して来て、中隊より動ける兵隊は豪州軍の使役に行けと伝達を受け、班の命令で自分もその中の一人としてフワール島に連れて行かれました。途中もしや殺されるのではないかと心配でしたが、飛行場建設の手伝いと聞かされ、ホット一安心しました。

島に着くと、作業開始前にドラム缶の中に捨ててある食パン、それも真中の柔らかいところだけ食べた切端が残飯として沢山捨ててあり、蠅がいっぱい群がっているのを追い払うようにして両手を突っ込んで食べました。その美味しさは今でも脳裏に焼き付き、六十年経った今でも忘れることは出来ません。

体に害になると云う意識も無く、下痢もせずに、また砂糖の入ったドラム缶の中を覗き、付いている糖分を爪でかいて舐めました。

アンマが終わって寝ようとする、今度はマラリア菌を持った蚊が飛んで来て眠りを妨げ、多くの兵隊がマラリヤにやられました。高熱が出ても体温計や医薬品も無く、頭痛が続き苦しみました。体力の衰えたところに栄養失調で、中隊で一日に二、三人は病死したことを覚えています。兵隊は口ぐせに、白い飯が腹いっぱい食べたいと、つぶやきながら死んでいったことを覚えています。

死んだ兵隊は、戦闘用の柄の短いスコップを使い、二メートル四方ぐらいの大きな穴を掘って薪を積み上げ、その上に屍を並べて夜焼くのでした。

昭和二十年八月十六日朝、アメリカ空軍の戦闘機が四、五機超低空で飛んで来て、「日本降伏」と云うビラを、ものすごい程多くまいて行きました。それを拾って、読み、自分達は本当だろうかと思ひ信用して良いものかどうか、毎日不安な日を過ごしました。

八月十九日、武装した豪州軍兵士が四十人程度上陸して来て、通訳の人を連れて、「日本降伏」と言

喫煙所にも行って、煙草の吸殻を拾って帰り、栄養失調やマラリヤ患者の入室している仮病室に行き、動けない兵隊に一服ずつ吸わせると、非常に喜んでいました。作業に行つて、もし残飯の屑、吸殻などを拾うところを豪州兵に見つかると、厳しい刑罰を受けるので、見つからないように気を配りました。

使役の作業には、午前七時三十分頃、豪州兵士が二人で連れに来て、作業開始が八時より十二時までで、昼食は一時間です。食事は四センチ角の乾パン四枚と、オートミルク一杯、それは日本の紙コップぐらいの食器一杯限りでした。午後一時より作業開始で、午後五時で終わり、豪州兵士は我々を中隊に連れて帰り、また翌日連れに来ます。食パンの残飯を拾って食べるのが楽しみで、毎日のように作業へ志願して行き労働をしました。お蔭様で命だけは何とか食いつなぎ長らえました。

昭和二十一年三月十三日の朝方、海の向こうに見たことの無い巨船が停泊しているのに気付く、

ひよつとすると、自分達を迎えに来たのではないかと思いました。みんな飛び上らんばかり喜んだことを忘れません。

班長の内田軍曹より「お前達マラリヤ患者と栄養失調者は、沖に停泊している第一便の船で日本に帰れるぞ」との通達があり、今までの苦勞も忘れました。三年間着用していた破れた半袖のシャツ、ボロボロの半ズボン、現地の木の皮の繊維で作った破れ草履を履いたままの哀れな姿でした。

豪州軍の舟艇が、沖の方に停泊している本船まで連れて行き、乗船が出来ました。迎えに来た船は「日章丸」という日本の貨物船でした。その日は昭和二十一年三月十五日の出港だったと思います。

今度こそは、皆と一緒に日本に帰れると喜んでいたら、船中でのマラリヤの再発と栄養失調で、残念にも祖国の土を踏むことも出来ず、船中で二十人ぐらい死んだと、船員に聞かされました。船中の一室に仏様が飾られ一晩御通夜をして、一

手厚い看護と治療で、病氣も次第に良くなり体力も回復しました。

昭和二十一年十二月三日、同病院の退院を許されて、生れ故郷の実家にやっと帰りつき、隣近所の人達も集まり、家族一同大変な喜び方でした。退院後、二年の間は年に二、三回はマラリヤも発病しましたが、その後は次第に元気で働けるようになりました。

今は年齢も満八十三歳になりましたが、飲まず食わずの軍隊生活の苦しかった頃のことなど、思い出しながら暮らす日々です。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十八年四月十日、熊本市西部第二十一部隊野砲隊第四中隊に現役入隊。

野砲隊であるので、中隊にいる馬四十六頭の世話の苦勞を語る。

昭和十八年八月九日、熊本駅から門司港駅、さらに佐世保港に着き、八月十一日朝九時、貨物船

人、一人、海にゆつくり沈めての水葬でした。その間、船が三回汽笛を鳴らして回りました。

船中での食事は米三、麦七の割合のお粥で味噌汁は菜っ葉の乾燥野菜で、とても珍しく美味しいものでした。

九日間の航海を終え、昭和二十一年三月二十四日午前十時、浦賀に上陸し、三年ぶりに日本の地を踏み感無量でした。夏衣の半袖のシャツ・半ズボン・木の皮で自分が作って履いていた草履も、途中破れて捨て、素足のままでした。

暖かい南の島より帰った自分達は、少し寒く感じました。早速収容所で身体検査があり、身長一メートル六十五センチ、体重三十六キロになっていました。やっと日本に帰ることが出来た嬉しさと安心したせい、肺炎とマラリヤを併発して、その日に、東京都立川市曙町の国立立川陸軍病院に入院でした。

四カ月経って、鹿児島国立伊敷陸軍病院に輸送され、八カ月間の病院生活を送りました。病院の

「松江丸」に乗船する。途中、大分県佐伯港に集結して船団を組み、駆逐艦二隻に護衛され、八月十二日の夜、佐伯港を出発する。

二十三日かかってソロモン諸島のニューブリテン島のラバウルに上陸し、ここで十日間の休養をとる。

さらに九月十三日、ボーゲンビル島へ転進し、キエタに到着、その日の夕暮に、目的地の同島のブインに到着、早速、南海派遣軍明第九〇二四部隊（山砲兵第六連隊）に編入される。戦闘序列は、第八方面軍―第十七軍―第六師団である。

ここでは食料が不足し、現地自活の邀撃態勢に入りながらも、体験記には、食事は芋の雑炊に米が少し入り、塩汁に芋の茎と葉が二、三枚浮んでいるのが毎日の主食で、肉類にはトカゲ、ワニ、ナマケモノを小銃で狙い撃ちして食したことが記録されている。蟬も捕えて焚火で焼くと、小海老のように美味しかったという。

そのうち、米軍戦闘機のグラマン機が四、五機、

来襲するようになり、機銃掃射に壕の中に逃げる生活となる。

ボーゲンビル島方面の戦闘は、昭和十九年十月頃、タロキナ付近の米軍と交替した豪軍部隊が十一月以降同島の各所において攻撃を開始した。第十七方面軍は、主力を同島南部に置き、ヌマヌマ地区、タリナ地区では現地自活による邀撃作戦に備えつつあった。

第八方面軍は、昭和二十年二月、第十七軍に対して、次のような趣旨の指導を行った。

一 戦局今や皇国興廢の関頭に直面する秋に臨み任務及び企図は一人十殺全軍玉砕以て敵の人的戦力を破砕し全局作戦の遂行を容易ならしむるにあり。

二 第十七軍司令官は現地自活態勢の確立及び戦力の増強を計りつつ補給可能の限度において積極的に作戦し皇国全般作戦に寄与すべし。かくして第十七軍は困難な状況下、常に全員玉砕の覚悟を以て奮戦したという。南部ボーゲンビ

ル島においては三月、第六師団主力の兵力を以てブリアカ河に敵を迎えて反撃を行い、またミオ河畔においても反撃作戦を決行、敵の後方にも深く挺進して補給線を攻撃し、敵の攻撃を著しく消極的にさせたという。

また軍は、エレベータ地区に最終的な決戦陣地帯を構築することを決め、後方諸部隊のほか諸島及びエキタ方面の兵力を集結して陣地構築を開始している。

エキタは体験記執筆者が、昭和十八年九月に船上陸した地点である。それから目的地である同島のブインに到着して、南海派遣軍明第九〇二四部隊に編入されている。